

商学部における特色ある学部教育の補助「国内実態調査」 報告書

テーマ	北海道の博物館・資料館におけるアイヌ文化・歴史の展示の比較										
科目名	国際教養演習Ⅱ										
担当教員	小田 悠生										
調査先	川村カ子トアイヌ記念館										
調査期間	2025年10月29日(水)					～	2025年11月1日(土)				
参加学生数	1 年生	名	2 年生	名	3 年生	3 名	4 年生	2 名			

調査の趣旨（目的）

本ゼミでは、アメリカ社会における文化的多様性や歴史認識のあり方について学んできた。本調査では、アメリカ・カナダについて学んだ入植者植民地主義という概念にもとづき、アメリカと植民の形態が似ていた北海道を対象に、近代以降の開拓の裏にある先住民族の犠牲を学び、歴史がどのように展示を通して語られているのかを考察した。具体的には、北海道開拓の村（札幌）、北海道博物館（札幌）、川村カ子トアイヌ記念館（旭川）の三館を訪問し、それぞれの展示がどの立場から北海道の歴史を発信しているのかを比較、分析することを目的とした。

調査結果

北海道開拓の村（1983年開所）では、明治期に北海道へ入植した開拓者の歴史に焦点が当てられている。たとえば、ニシン漁で知られた青山家の生活施設では、出稼ぎ労働者が畳一畳ほどの空間で寝食を済ませていたことが紹介され、当時の劣悪な環境を生々しく伝えていた。また、移住者の住居は出身地ごとに再現されており、戊辰戦争後に北海道へ移住した会津出身者の住宅は、風雨をしのぐにはあまりに簡素で、開拓初期の厳しい生活が容易に想像できた。このように、同館は開拓者の努力や苦勞、そしてその「功績」を中心に据えた展示構成となっている。

開拓の村と隣接する北海道博物館は、開拓記念館（1971年開館）とアイヌ民族文化研究センター（1994年開所）を統合し、2015年に設立された。開拓記念館は開拓100周年事業の一環であったため、アイヌ文化に関する展示はあったが、基本的には開拓を記念する視点が強い施設だった。アイヌ民族文化研究センターは、民間や大学を中心に進められてきたアイヌ文化に関する研究を体系的に行う公立機関の必要性、研究成果を継承・学習につなげる場を公的に設けるためにつくられた。両者の統合後は先住民族であるアイヌの視点を重視し、同化政策や旧土人保護法といった負の歴史にも踏み込んでいる。館内の展示は氷河期にさかのぼる北海道の自然環境、開拓の歴史、屯田兵制度、松前藩の政治、高度経済成長期まで幅広く、総合的な歴史博物館として充実している。また、失われつつあるアイヌ語や、差別のもとで生きた一家族の歴史がイラストとともに紹介されており、子どもにも理解しやすい構成となっていた。一方、テーマが広範であるがゆえに、アイヌ文化が多くの展示の一部として組み込まれ、深層的な文化や歴史の重みがやや薄まってしまう印象も否めなかった。

三つ目の川村カ子トアイヌ記念館（旭川）は、1916年にアイヌ民族運動家・川村カネトが私費で創設した博物館であり、現在も地域のアイヌコミュニティによって運営されている。日本でもっとも古いアイヌ資料館である。ここでは語り手が明確にアイヌ自身であり、展示の濃密さが特徴的であった。館内には、木彫りのクマが何百体も並び、精緻な文様が施された衣服や装飾品、さらには死装束までが所狭しと展示され、生活文化と精神文化の双方からアイヌの世界観が強く伝わってきた。

また、記念館は展示施設にとどまらず、地域のアイヌの方々が集い、文化を継承する場としても機能してい

る点が非常に印象的であった。しかし、私設館であるがゆえの規模や資金面の制約は明らかで、展示の幅や設備面では公立館に比べ限界があるように感じられた。



開拓の村にて～中大OBのボランティアガイドの方から説明を伺う



北海道博物館にて